

# 補文標識「の」「こと」「もの」の使い分けについて

—韓国語を母語とする日本語学習者の立場から—

On the Use of Japanese Nominalization Marker “no” “koto” “mono”

— From a Perspective of Korean Learners of Japanese —

川 越 菜 穂 子

KAWAGOE Nahoko

## 1. はじめに

本稿では、連体節の被修飾名詞となる「の」「こと」「もの」の使い分けが日本語非母語話者、特に韓国語母語話者である日本語学習者にとって、なぜどのように問題になるかについて日本語教育の立場から考察する。

「の」と「こと」は動詞や形容詞を名詞化する働きをする補文標識と呼ばれる。これらには、主文の述語の性質により使い分けがある。

- ・電話が鳴っているのが聞こえませんか。(『Situational Functional Japanese』)
- ・私は歌を歌うのが下手です。(同上)
- ・関係の回復が一日も早く実現されることを願う。

いずれの例でもそれぞれ「の」と「こと」を入れ替えることができない。一方、「わかる」「気づく」「知る」などのように「の」と「こと」両用が可能なものもある。

- ・その会社にはさまざまな問題がある {こと／の} がわかった。
- ・名簿を見ていて、自分の名前が抜けている {こと／の} に気づいた。

これについては古くから多くの議論がされ、「の」が「同時性、同一場面性」などの「密接性」を持つという方向で落ち着いてはいるようだが、その議論の成果が日本語教育にいかされているとはいいいにくい。そのため、上級レベルになってもこれらの使い分けがわからないと訴える学習者がある。それは日本語のカリキュラムに偏りがあるためと推測される。一般に、入門期をすぎた初級で「きのう買った本」のような連体修飾節が登場し、やや複雑な文を扱うようになっても、主文の述語の種類は限られており、その範囲においては特に間違うことがない。また、「もの」は「冷たいものを飲みたい」のように実質名詞としてしか扱われない。初級後半から中級になると、「の」と「こと」は名詞化の補文標識として扱う場合もあるが、混乱を避けるためか使い分けをはっきり提示することは少ない。そして、「のだ」「ものだ」「ことだ」「ことがある」など文

末の定型表現として固定化したものを学習項目として扱う。中上級レベルになって作文を書こうとすると、もっと多様な述語を用いることになるが、それまでの知識では到底足りず、使い分けの原則が身に付いていないため、どのような名詞節の形式をとるのがわからなくて、次のような誤用が生じる。(K. は韓国人学習者の作文)

・安定的に働ける日が来るのを願う。(K. の→こと)

また、「の」と「こと」の使い分けについては、引用の「と」との比較ともあわせて多くの議論があるが、「こと」と「もの」の使い分けについてはあまり議論されていないようだ。「こと」が動作行為、作用、変化などの事態を表し、「もの」は具体的・抽象的な存在を指すことは自明であるとされても、そのことと実際の語の使い分けは必ずしも学習者にとってわかりやすいとは言えない。これら、語彙論上の問題と、構文上の問題がからみあったものをいかにわかりやすく学習者に示せるかが現場の課題である。

## 2. 「の」「こと」の使い分け

前節の例で示したように、述語によって「の」専用のもの、「こと」専用のもの、「の」「こと」両用のものがある。そもそも「の」と「こと」によるとらえ方の違いは何かということと、それぞれどのような述語が現れるかについては、多くの議論がされてきたし、新たに付け加えることはあまりない。ただ、現象の記述については各論で大きな違いはないが、それらをどう抽象化し、特徴づけるかということと、両用の場合「の」と「こと」で意味に差が生じないのかが問題となる。ここでは、佐治圭三(1993)があげている述語の類を引用し、各類の特徴付けを検討して、日本語教師が教材として考える上でわかりやすい「ラベル」を考える。

### 2. 1 「の」「こと」の違いの本質

久野暲(1973)は「の」がつく補文は「五感によって直接体験される具体的動作、状態、出来事を表す」のに対して、「こと」は「抽象化された概念をあらわす」としている。その後の研究も、ほぼこの考えを踏襲したものである<sup>注1)</sup>。佐治(1993)は「の」を受ける述語は「事態を現場のありさま、動きのままとらえ」、「こと」は「現場から離れて、一つのまとまった事柄としてとらえる」ものであるとし、「の」専用の述語は「事態の現場に同時にいなければ、実現しないようなもの」、「こと」専用は「事態を一つのまとまった事柄としてしか扱わず、普通にその現場から離れたところで成り立つもの」、「の」「こと」両用は「事態を全体でまとまった一つの事柄としても、現場の中の動きとしてもとらえることのできるもの」としている。「の」専用の動詞の

注1) 橋本修(1990)は補文の意味役割が「対象となることながら」なら両用、「生産されることがら」なら「こと」専用のように、やや違った説明の仕方をしている。

典型は「見る」「聞こえる」などの感覚動詞であるが、ほかにも「待つ」「手伝う」などの動詞もあるので、佐治の説明の方がより一般化された説明になる。

「の」「こと」の使い分けに関する先行研究については、野田春美（1995）に、よく整理されており、統語的制約に関する研究、埋め込み節（補文）の内容の性質に注目した研究、主文の動詞の性質に注目した研究に分類して、それぞれの特徴や問題点を指摘している。野田（同）は、佐治（同）の上のような説明を諸研究の成果をふまえた妥当なものであるとし、ただ、「現場にいなければ」という「同一場所性」については、次のような「現場にはいない」反例があるとして、「事態の実現にあわせてしかできない動作を表す」ということで十分ではないかとしている。

・テニスコートがかわくのを部屋で待った。

たしかに待っている間は「現場」にはいないかもしれないが、いずれテニスコートに出て行ってかわいたかどうかを確認するわけだから、「列車が到着するのを待つ」という場合と基本的に変わらないと思う。あるいは上の例は、場所とは考えずに時点と考えるべきかもしれない。時点を待つ場合には次のような言い方をする。

・3時になるのを待って出かけた。

以下、「の」専用のもの、「こと」専用のもの、「の」「こと」両用のものを見る。

## 2. 2 「の」専用のもの

佐治（1993）は「の」専用のものに次の3つのタイプを挙げている。（説明の便宜上、記号を付ける。以下、同様）

- a. 感覚動詞（「見る」「感じる」など）<sup>注2)</sup>
- b. その場でその動きにあわせてしかできない行動を表す動詞  
（「(写真に) とる」「移す」「あわせる」「応じる」「待つ」「手伝う」など）<sup>注3)</sup>
- c. 現場に応じた感情や判断を表す形容詞（「うるさい」「やかましい」など）

姫野昌子（1993）は上記のもの以外に次の3つのタイプをあげている。なお、同じ項目に動詞、形容詞、連語が含まれる。また、「比較・対照」に上がっているものは主文の述語ではない。

- ・必要性・適合性：必要だ、いる、役立つ、使う、かかる、都合がいい、具合がいい、便利だ、～すぎる
- ・比較・対照：対して、反して、比べて、比較して
- ・異同・類似：同じだ、同時だ、同様だ、似ている、違う、異なる

注2) 工藤真由美（1985）では、このaの類の動詞を視覚、聴覚活動を表す動詞としているが、「冷たいものがほほに触れるのを感じた。」「チョコレートの甘さが口の中に広がるのをゆっくりと味わった。」「異様な臭いがあたりに漂っているのを感じた。」のように視覚、聴覚以外の感覚にも使うので、感覚動詞としておいた方がよいだろう。

3) 工藤（1985）はこれを「動作性動詞」と名づけ、ほかに、送る（見送る）、追う、さえぎる、会う、おさえる、助ける、冷やす、直す、遅れる、止まる、やむ、などをあげている。

いずれも「～のに」「～のと」など「が」「を」以外の助詞をとるものなので、佐治や工藤の分類からははずれているのかもしれない。姫野のこの3つのタイプは、次のように必ずしも現場で起きていることをとらえるものではなく、一般化した事態をさしている。このような場合に佐治の説明をどうあてはめるのかわかりにくい。

- ・このはさみは花を切るのに使います。(『みんなの日本語初級』42課)

### 2. 3 「こと」専用なもの

「こと」専用として、佐治(1993)があげているのは次のようなものである。

- a. 言語行為を表す動詞(「いう」「しゃべる」「伝える」「述べる」など)
- b. 言語および何らかの表現行動によって伝える意の動詞  
(「命じる」「禁じる」など)
- c. 心内言語行動を表す動詞(「思う」「信じる」など)
- d. 事態を全体で一つのまとまった事柄としてとらえる動詞  
(「ある」「ない」「きめる」「きまる」「できる」「する」「よる」など)

工藤(1985)はこれら4つの類の動詞のうち、aの類の動詞を「伝達動詞」(伝達活動に関する動詞)、bの類の動詞は「意志動詞」(要求、禁止、許可、願望、決心など、さまざまな意志活動を表している動詞)、cの類の動詞を「思考動詞」とし、またdの類の動詞はあげずに、かわりに「示す」「さす」「証明する」「意味する」「ふれる」「判明する」などをあげて「表示動詞」と名付けている。bの類の動詞を「言語および何らかの表現行動によって伝える意の動詞」としたのでは、伝達行為しか意味せず、aの類の動詞と区別がつかない。またこれを「意志動詞」と呼ぶと「食べる」「学ぶ」なども含まれてしまうので、「発話によって事態の実現を働きかけることを表す」(野田1995)のような説明が適切だろう。佐治のdの類の動詞は、「～たとことがある／ない」(経験)、「～ことができる」(可能)などの定型表現として初級教科書にも扱われるものである。

以上のことをふまえ、ここでは、次のようにラベルを付けることにする。

- a. 伝達を表す動詞(「いう」「しゃべる」「伝える」「述べる」「書く」「知らせる」など)
- b. 発話や文書などによって事態の実現を働きかけることを表す動詞  
(「命じる」「禁じる」「望む」「許す」「約束する」「決める」など)
- c. 思考を表す動詞(「思う」「信じる」「疑う」「理解する」など)
- d. 事態を全体で一つのまとまった事柄としてとらえる動詞  
(ことが+「ある」「ない」「できる」／ことに+「きまる」「する」「よる」など)

### 2. 4 「の」「こと」両用なもの

佐治(1993)の分類による「の」「こと」両用のものは多い。

- a. 事柄の実現・非実現・終了などを表す動詞  
(「はじめる」「よす」「やすむ」「終る」「さける」「防ぐ」など)
- b. 認識活動を表す動詞 (「知る」「忘れる」「確かめる」など)
- c. 感情を交えた評価行為を表す動詞  
(「うらやむ」「かなしむ」「にくむ」「このむ」「ほめる」「おどろく」など)
- d. 事柄や行為に対する対応の仕方を表す動詞  
(「あわてる」「気をつける」「なれる」「まごつく」など)
- e. 教授・学習を表す動詞 (「教える」「習う」「覚える」「まねる」など)
- f. 評価・判断を表す形容詞 (「よい」「悪い」「すばらしい」「ありがたい」など)

これに対し、工藤 (1985) は大きく「認知動詞」と「態度動詞」の2つの類に分ける。bは「認知動詞」に、cは「態度動詞」に含まれる。また、dは工藤のあげている動詞のリストには含まれるものがないが、「態度動詞」の中に「とまどう」という動詞があがっているため、dは「態度動詞」に含まれるのだろう。また、eの類は工藤の分類には含まれないようだ。佐治の分類のトップにあがっているaの類は工藤では「その他」としか示されておらず、野田もこれを問題として指摘している<sup>注4)</sup>。

ここでは次のように分類することにする。

- a. 事柄の実現を止めることを表す動詞<sup>注5)</sup>  
(「よす」「やすむ」「終る」「さける」「防ぐ」など)
- b. 認識活動を表す動詞  
(「知る」「気づく」「わかる」「忘れる」「思い出す」「確かめる」「意識する」など)
- c. 事柄に対する感情や評価を表す動詞および形容詞  
(「うらやむ」「悲しむ」「憎む」「好む」「嫌う」「楽しむ」「後悔する」「ほめる」「驚く」「好きだ」「嫌いだ」「よい」「悪い」「すばらしい」「ありがたい」など)
- d. 事柄や行為に対する対応の仕方を表す動詞  
(「あわてる」「気をつける」「なれる」「まごつく」など)
- e. 教授・学習を表す動詞 (「教える」「習う」「覚える」「まねる」など)

### 3. どう教えるか

姫野 (1993) は、まず、「の」専用の場合を覚え、あとは「こと」でもよいと指導したらどう

---

注4) なお、工藤のリストは動詞のみを考察の対象として扱っているため、佐治のfは含まれない。

5) 「はじめる」と「やめる」の振る舞いは必ずしも同じではないようだ。「やめる」は両用のようだが、「はじめる」は「～のをはじめる」とはいいいにくいのではないだろうか。

かと提案している。「の」専用の場合とは、「～のを」を受ける動詞で、「見る」「聞く」「感じる」「待つ」「手伝う」「助ける」「(現実)に起こるのを」とめる」「防ぐ」「邪魔する」および「～のが」を受ける「見える」「聞こえる」など「感覚等、同一場面性」を持つものを1つの類とし<sup>注6)</sup>、これに2. 2で引用した「必要性、適合性」「比較、対照」「異同・類似」の3つの類を加える。そして、「いい」「よくない」「正しい」「困る」など「～のは」を受けて話者の価値判断をいう場合も「の」の方が自然としている<sup>注7)</sup>。また、「京都へ行ったのは8月だ」のようないわゆる分裂文も「～のは～だ」という文型になるものとして加えている。

藤田直也(2000)では、日本語の文法構造を初級・中級の日本語学習者にいかにわかりやすく教えるかという立場から、教師が日本語学の知識をどう分析すればよいかを示している。たとえば、「構文に使われる述語形は「語幹」「辞書形」「テ形」の3つしかない。」「従属節(補文あるいは埋め込み文)のマーカ―は「こと／の」「と」「か」「ように」の4つである。」など、単純化して教えることを提案している。「こと」と「の」の使い分けについては、まず一方しか使えない場合は数が少ないのでこれを教え、次に、どちらでもいい場合を教えるとする。「の」専用のもので「田中さんが食べたのは何ですか?」のような疑問詞が強調される分裂文、そして「見る／見える」「聞く／聞こえる」「～を耳にする」などの知覚動詞をあげる。一方、「こと」しか使えないものとして「XはYです」の構文(「私の趣味はテニスを見ることです。」のような文)をあげる<sup>注8)</sup>。「こと」についてはそれを受ける動詞をあげていないので、まず「の」専用を教え、あとは「こと」でもよいとする姫野(同)と同じと考えてよいだろう。

「こと」専用の動詞(2. 3)はdの類をのぞき、初級で扱う範囲の語に関してはたいてい引用の「と」で間に合わせることもできるので、まず「の」専用を教え、あとは「こと」でもよいというのは合理的な教え方とも言える。しかし、初級で提出される語彙の中で、「の」専用の動詞(2. 2)は知覚動詞のほかに、「待つ」「(写真に)とる」「手伝う」など、bの類の動詞にも多く含まれる。この2つの類の動詞を個別的に覚えさせるだけでは、中級以上で「の」と「こと」の自然な使い分けを迫られたときに応用がきかないだろう。はやいうちに原則を理解し、繰り返し使うことで身に付くと考える。藤田(同)は「上級の学習者に対しては、自然な日本語を身につけるためニュアンスの微妙な違いも説明できるようにしたい」としているが、中級前期から必要だと思う。さて、その「微妙な違い」であるが、藤田(同)は、牧野成一(1996)を参照しながら、日本語母語話者の直感にもあったものとして次のように説明する。

注6) 姫野(1993)では「の」の用法全般にわたって日本語教育における扱い方を述べているので、「の」「こと」の使い分けについてや1つ目の類の動詞を具体的にどのように教えるかについては述べていない。

7) これは2節の分類では「の」「こと」両用に含まれるものである。どういう場合が自然なのか、限定する条件が必要だろう。

8) 松岡弘(2000)は、この文型では「こと」を「の」にして「私の趣味はテニスを見るのです」というと「～んです」との区別ができなくなると説明している。学習者にとってはわかりやすい説明だろう。

- ・「こと」はかたいイメージで、「どこか突き放した感じ」を与える。
- ・「の」は柔らかいイメージで、「話者の世界に取り込む」機能をもつ。

これを学習者に浸透させることができれば、使い分けはさほど困難なものではなくなるという。「客観的」「主観的」のような用語を避ければこのような説明になると考えられる。藤田は次のような例を挙げて「の」の方が話者の感情が一段と自然に伝えることができると説明する。

- ・フランス語をマスターする {こと／の} はむずかしい。
- ・スミスさんがアメリカに帰った {こと／の} を知っていますか？

この例のニュアンスの違いは母語話者の間でもはっきりしないのではないだろうか。そもそも、これは会話文なのか書かれた文なのかがよくわからない。作文をする場合なら、「フランス語をマスターすることはむずかしい。」と書いても自分の体験として実感がこもっていないとは言えないし、また、もう一つの文は実際の会話なら次のように助詞を省略していうことが多く、このように示されるとニュアンスの違いはいよいよわからない。

- ・スミスさん、アメリカに帰ったの、知っていますか。
- ・スミスさん、アメリカに帰ったこと、知っていますか。

また、次のようになら「かたい」文でも「の」は不自然ではない。

- ・うつ病は誰にでもかかる可能性があるのを知っておくべきである。

このように補文の事態が過去の出来事や一般的事実を表す場合には差はあまり生じない。しかし、「の」が「現場性」を持つという機能は、補文の表す事態が「いま、ここ」である場合には生きてくる。

- ・被告はトラックが来るのを知らなかったといっています。

(「12人の優しい日本人」シナリオ)

これは、道路上に立っていた人がトラックが近づいてくことに気づけなかったという状況を言っている。もしこれを「トラックが来ることを知らなかった」というと、あとでトラックが迎えに来るといような意味にとられかねない。補文の事態が「いま、ここ」を表す場合には、「知る」という動詞が「の」を受ければ「気づく」という意味にずれ、「こと」を受ければ「知識として知っている」「理解する」という意味に近くなると考えた方がよいだろう<sup>注9)</sup>。違いを説明するなら、このことがはっきりするような例を選ぶべきだろう。

#### 4. 日本語教科書における「のだ」「ので」「の」「こと」の扱い

藤田(2000)は「の」の「話者の世界に取り込む」機能は名詞化の場合だけでなく、「んです」

注9) 奥田靖雄(1983)は感性的な活動を示す動詞は「すること」と組み合わせると、「動詞の語彙的な意味にずれ=抽象化がおこって、むずびつきの性格がかわってくる」と説明している。同様の指摘は工藤(1985)、野田(1995)もしている。

にも引き継がれて「聞き手を話者の感情に同調させる」効果をもたらすとする<sup>注10)</sup>。藤田のあげる例によると、たとえば、具合が悪そうにしている人を見て、「どうしたんですか」と聞くが、医者は「どうしましたか」と聞く。医者はプロとして患者の症状を客観的に分析することが必要で、「どうしたんですか」と言ったのでは同情し、心配している気持ちは伝わるが、医者の発話にはそぐわない。この違いは学習者にも納得しやすいらしい。

この節では「の」を共有するものとして、「のだ」と理由を表す「ので」が日本語教科書でどう扱われているかを見る。「のだ」が付く場合と付かない場合、理由の「ので」と「から」の対比で、「の」の「同調性」を教えることもできるかもしれない。

用法や意味を分析した上でそれをどう教えるかが問題になるが、その次に問題になるのはいつ教えるかということである。たとえば、「のだ」（「んです」）は理解がむずかしいからといって、初級で扱わないわけにはいかない。「のだ」を使わなくても意味は伝えることはできるが、日本人が頻繁に使う「のだ」を早めに理解しておくことは重要である<sup>注11)</sup>。また、子供は別として大人の学習者には、ある程度用法を分析して理解するよう手助けする必要がある。

日本国内で広く使われている教科書『みんなの日本語初級』（全50課。スリーエーネットワーク。1998年。以下『みんな』）では、26課で「んです」を導入し、『文法解説』で「原因、理由、背景などを強調して説明するのに使われる」（原文英語）と説明する。また、挿絵の多いことと自然な表現で定評のある『文化初級日本語』（全37課。文化外国語専門学校編。1987年。以下、『文化』）では16課で「んです」を導入し、「説明、理由、確認、強調など話し手が特に注意を向けた場面で使われる」（『教師用指導手引書』）と説明している。「んです」は普通形に接続するので、マス形で導入されてきた動詞や形容詞のテ形やナイ形（否定形）、タ形（過去形）などを一通り学習したところで辞書形を導入し、そこでようやく「んです」が登場するので、初級教科書の半ばあたりで登場することになるのだろう。『文化』では「分析的に指導するのではなく、受け答えの中で自然に「～んです」が使用できるようにする」と指導手引書の留意点に述べているが、これは分析の解説で終わってしまっただけではないという意味であろう<sup>注12)</sup>。

一方、理由を表す「から」と「ので」は、丁寧形に接続できる「から」を前半で導入し、普通形に接続する「ので」はかなり遅れて導入する教科書が多い。『みんな』では「から」は16課、「ので」は39課で導入する。これに対して『文化』では「から」は13課、つづけて14課で「ので」を導入する。なお、ここの「ので」は日記文の中で事実を説明する文に使用したものを例示しているが、練習は「暑いので、窓を開けてもいいですか」のような例をあげ、「控え目に自分の意

注10) 「のだ」の「の」と補文標識の「の」の共通性については国広哲弥（1992）が述べている。

11) 藤田（2000）も同様の指摘をしている。

12) 『文化』16課では医者に言って自分の症状を説明するという設定で「んです」の例文を多く提示している。なお、本文会話では医者も患者に会うなり「どうしたんですか」と聞いている。



向を表す表現の中で練習する」としている。『みんな』のような扱いは、「から」でとりあえずしばらくは間に合わせる、あるいは「～んです」「～んですから。」などで代用するというものである。しかし、そんなことを理解していない学習者は「理由」を言う表現として次のような発話をして聞き手に不快感を与えてしまうことがある。早めに「ので」を導入し、違いを理解させた方がいいだろう。

・すみません。バスが遅れたから遅刻しました。

(→「バスが遅れたので～」というべき<sup>注13)</sup>)

さて、名詞化の補文標識「の」と「こと」の導入順は教科書によってまちまちである。『文化』では次のように「こと」は定型表現<sup>注14)</sup>、「の」は評価の感情を表す形容詞に限定して導入する。

11課 [自己紹介で趣味を言う]「～のが好きです。」(「好きだ」という形容詞1つに限定して練習)

18課 [「日本にいる留学生」をテーマにした作文。初めてまとまった文章を提示]

「～のは残念な／大変な／よくない／楽しいことだ。」(述語はいくつかの形容詞に固定して補文を作る練習)

22課「たことがあります」(経験)「ことができます」(可能)<sup>注15)</sup>

『みんな』は18課の辞書形の導入とともに可能表現の「ことができます」を導入するが、これまで見てきたような名詞節の補文標識としては扱わない。補文標識としては「の」のみが38課と42課で扱う。38課では次のように5つの文型に分けてかなりの種類の述語とともに導入されている。ただし、種類が多いのは形容詞で、「のを+動詞」は「忘れる」と「知っている」の2語のみである。(下記の用例は練習A、Bおよび例文より)

・一人でこの荷物を運ぶのは無理です。

(この類としてほかに「気持ちがいい」「おもしろい」「楽しい」「大変だ」「危ない」「体にいい」「体によくない」「無理だ」「むずかしい」)

・私はクラシック音楽を聞くのが好きです。

(この類としてほかに「下手だ」「早い」「速い」「遅い」)

・電気を消すのを忘れました。

・明日田中さんが退院するのを知っていますか。

注13) 国広 (1992) は「ので」が客観的、「から」が主観的とする永野賢説は捨てられるべきだとして、「のに」「のだ」と共有する「の」の意義素から、「ので」は主観的「から」は客観的としている。『みんな』や『文化』は永野説を採用している。

14) 改訂版の『新文化初級日本語』(全36課・2000年発行) 16課では本文会話に「他にわからないことはありませんか」という1文を加え、「先生が話すことはだいたいわかります。」「A: いちばん楽しかったことは何ですか。B: 温泉に入ったことです。」のような練習が加わっている。

15) 能力の可能は動詞の可能形(書ける、食べられるなど)を使い、「ことができます」は「ここでタバコを吸うことはできません」のような決まりや規則での可能の表現として扱うとしている。

- ・娘が生まれたのは北海道の小さな町です。(分裂文)
- ・この橋ができるのはいつですか。(分裂文)

「忘れる」は「知っている」と同様に「の」「こと」両用の動詞である。この教科書の用例では「知っている」は「こと」に言い換えても不自然にはならないが、「忘れる」の方はいずれも「の」の方が自然である。

- ・薬を飲む／山田さんに連絡する／卵を買う／宿題を持って来る／(手紙に)切手を貼る／、  
(コンサートに誘った人にその)時間を言う／机の鍵をかける／書類をしまう／コンピューターの電源を切る／車の窓を閉める {の／?こと} を忘れました

これは、次のような場面に限定して使っているためと考えられる。忘れたことを思い出した瞬間の発話である。事態そのものは過去のことであるが、思い出したのは今で、その意味で「同時性」があるといえるのかもしれない。

- ・ A: あ、いけない。 (練習 C)
- ・ B: どうしたんですか。
- ・ A: 机の鍵をかけるのを忘れました。

したがって、次のような場合は「こと」でも自然であるが、この教科書ではそのような場合を避けているわけである<sup>注16)</sup>。

- ・ 昨日の夜は、宿題がある {の／こと} を忘れて寝てしまいました。

42課では「ために」とともに、「動詞辞書形+のに」「名詞+に」の文型を、目的を表す表現として導入する。なお、述語には「使う」「いい」「便利だ」「役に立つ」「時間がかかる」のような表現が来るとのみ説明している。「の」専用として姫野(1993)があげている「必要性・適合性」の類である。

- ・ このはさみは花を切るのに使います。
- ・ 電話番号を調べるのに時間がかかりました。
- ・ このかばんは大きくて、旅行に便利です。

「の」と「こと」の使い分けを積極的に説明している教科書もある。『Situational Functional Japanese』(全24課。つくばランゲージグループ編)では、16課で「の」と「こと」両方を示して、その使い分けについては「一般的に、会話ではノがコトよりもよく使われる」(原文英語)と説明している。

- ・ アニルさんは日本語を話す {の／こと} が好きです。
- ・ スミスさんが国に帰るのを知っていますか。
- ・ きょう授業がないことを知りませんでした。

---

注16) 名詞化の補文標識の文型としてではないが、同じ課で「こと」を次のような例文で示している。

・ 初めて好きになった人のことを覚えていますか。

また、次の3点を付け加えている。

- ・「の」専用：「～のを見る／聞く」「～が見える／聞こえる」
- ・「こと」より「の」を取りやすい：「上手だ」「下手だ」「好きだ」「嫌いだ」「いやだ」
- ・「こと」専用：「NはNです」という文型

さらに同じ課で「もの」と「ところ」による名詞節も示している点も注目に値する。

- ・目印になるものがありますか。
- ・2階がディスコになっているところです。

この教科書の「一般的に、会話ではノがコトよりもよく使われる」という説明は「「の」は柔らかい、「こと」はかたい」というのに通じる説明で、まずはそれでもいいかもしれないが、「同時性」の説明も簡単な例文で示すことはできるから、ここで触れるべきだろう。教科書に載っていないからといって、使い分けについて触れずに初級を終わるべきではないだろう。中級に進んだ学習者が困ることは十分に予測できる。

## 5. 韓国語を母語とする日本語学習者の作文に見られる誤用

これまで「の」「こと」の使い分けを見てきたが、これに「もの」も加えて、韓国語を母語とする日本語学習者は中上級レベルになっても使い分けが分からないと訴えるものがある。実際、作文を見ると間違いが多い。

- ・会社を選択するのにおいて自分のことを一番大事にしているのをわかった。  
(K. のを→ことが)
- ・年長の人々は地域の固有の味を覚えているけれども、若者はこの味を全然知らないので食文化の多様なおもしろさがなくなってしまうものも問題である。(K. もの→こと／の)
- ・幸いに、よい印象ということに対しては人によって差がある。  
(K. ことに対しては→ものには)
- ・仕事がちゃんとあるのに、それをあきらめてしまうのは人生の3分の2をあきらめるのと同じものではないだろうか。(K. もの→こと)

韓国語は語順だけでなく構文上も日本語と非常によく似ている部分が多く、日本語の学習進度も英語話者などに比べると格段に速い。しかし、似ているがために、作文をするときにも韓国語で考えてそれをそのまま逐語訳的に日本語に置き換える学習者がいる。そして韓国語と日本語のずれがある部分でつまづくことになる。「の」「こと」「もの」の使い分けもその一つだと考える<sup>注17)</sup>。

注17) 英語話者にとってもその使い分けはむずかしいことには変わりはないが、韓国語話者がつまづく原因は英語話者とは違い、「こと」や「もの」を表す名詞・形式名詞が日本語と韓国語でほとんど同じとも言える構文に現れ、しかもそれらが持つ概念が日本語とはずれているという点で、より母語の影響が出やすいと推測する。ただし、十分な量の資料がないので今の段階では断定はできない。

文を補文とする場合には것 kōt、일 il、짓 chit などの名詞や、기 ki、지 chi などの接辞を使用し、用言の連体形を日本語と同じようにその前に置けばよい。

- ・今日の飛行機が遅れるのは確実です。  
비행기가 늦는 것은 확실합니다.  
飛行機が 遅れる ことは 確実です
- ・東京へは一人で行くことにした。  
도쿄에는 혼자서 가기로 했다.  
東京へは 一人で 行くことに した
- ・困ったことが起きました。(K-J コーパス)  
어려운 일이 생겼어요.  
むずかしい ことが 起きました
- ・暇というものは忙しさとは関係ないと私は考える。

(宮脇俊三「サラリーマン小遣いのやりくり」)

틈이라는 것은 바쁜 것과는 상관 없다고 나는 생각한다.  
暇であるという ことは 忙しい こととは 関係 ないと 私は 考える

名詞としての것と일을対照すれば意味はそれぞれ「もの」と「こと」になるが、単純に置き換えることができない。上の例の対訳にあるように、韓国語の것 kōt は<sup>注18)</sup>、日本語の「もの」「こと」「の」のいずれの場合にも広く使われ、일 il は「こと」「仕事」「事情」などを意味する名詞として使われるからだ<sup>注19)</sup>。とくに、話しことばでは、実質的な「仕事」「話」「意味」<sup>注20)</sup>などを意味するような場合を除き、것 kōt を使うことが多いようである<sup>注21)</sup>。したがって、“直訳”はまるで役に立たない。

#### [補文標識「の」「こと」両用の場合の「の」→「こと」]

次の2例は、「の」でも文法的に間違いとは言えないが、「こと」の方が自然である。

- ・おもしろさより大切なことがあるのを気づいたからだ。(K. のを→ことに)

注18) 것 kōt はつねに修飾語の後ろに置かれる。韓国語文法ではこのような名詞を「不完全名詞」「依存名詞」などと呼ぶ。日本語では「食べる物が無い」のような文の「もの」は実質名詞、「昔はよく飲んだものだ」のような文の「もの」を形式名詞と考えるが、韓国語ではいずれの場合も「依存名詞」となる。なお、日本語の「もの」は「物が足りない」のように独立して主語に使うこともできるが、짓はできない。

19) たとえば、「しなければならぬことがたまっている。」の対訳「해야하는 일이 밀려 있다.(K-J コーパス)は「する仕事」で、일을짓に変えると「仕事以外にもいろいろなこと」という意味になる。

20) 日本語で「～とは～ということだ」の「こと」は「意味」を、「～によると～ということだ」の「こと」は「話」を意味する。

21) たとえば「～に共通点があることがわかる」を～에 있음을 알 수 있다.(K-J コーパス) というように있다という動詞語幹に을という名詞化接辞をつけて「あること」というのはかなりかたい論文調で、있는 것(「ある」の連体形+こと)ということが多い。

「気づく」は「こと」「の」両用の動詞で、使い分けも比較的わかりやすい。この文は、第一印象で人を判断することについて述べたものであるが、この場合真理や原則をいっているのがあって、それを悟ったという意味で、「一時的／現場的」なものではない。「こと」の方が自然になる。

- ・(図から) やはり自分がやりたい仕事、自己実現を大事に思っているのがわかる。

(K. の→こと)

この場合も、データからわかる分析結果であって、現場で観察して気づいたことではないため、「気づく」の例と同様、「こと」の方が自然である。以上のような例は説明がしやすい。

ところで、補文内の語の選択やアスペクト形式などが原因で文が不自然になると考えられる場合もある。次の例は、「誇らしい」という評価を表す形容詞で受けているものだが、「の」「こと」どちらでもいいはずである。

- ・(そのころ) 大きな企業で勤めているのはとても誇らしいことであった。(K.)

この文は「大きな企業に勤めていることは誇らしい」とすれば多少その不自然さが解消されようでもあるが、日本語母語話者なら次のように言うだろう。

- ・大きな企業で働く {こと／の} はとても誇らしいことだった。

## [[「こと」「もの」の使い分け]

また、「こと」と「もの」、とくに「～ということ／もの」の「こと」「もの」の使い分けにも誤用が多い。誤用例を見れば「もの」は具体的・抽象的ものの存在で「こと」は事柄、事態であるという説明は、概念そのものは理解できても、実際にことばを使う場合には、学習者には不親切な説明であることがわかる。具体的なものを指す場合でさえ、「こと」を使うことがあり、抽象度の高い概念や、文の構造が複雑になると誤用が生じやすい。

- ・これだけは辛くなってほしいと望むことが2つある。ラーメンとキムチだ。

(K. こと→もの)

- ・職業ということは、個人として大事なことである。(K. こと→もの)

「望むこと」が「ラーメンとキムチが辛くなること」という事柄であればこの文は成立するが、「ラーメンとキムチ」なら「もの」にしなければならない。「職業」を「働くこと」と言い換えれば「大切なこと」になる。これら「もの」の名前を「こと」とするのは初歩的な誤りである。次の例は、「こと」は「ことわざ」を指しており、「もの」とすべきである。

- ・南部の中でも面白いことわざがある。全羅道ではどんな食堂に入っても料理がおいしいが、慶尚道ではどんな店に入ってもまずいということである。それは、韓国の中では全羅道の食べ物には特においしいが、慶尚道はまずいことを遠回しにいうことである。

(K. こと→もの)

「それは～ということである」という文型でことばの意味の説明や定義に使う。この文の2つめの「こと」は、「遠回しにいう」を省けば不自然ではなくなる。このように文が長くなるとわかりにくくなり、またよく使う文型をそのまま当てはめてしまうために誤用が生じることもあるとも考えられる。

ところで、たとえば「競争」のように「する」をつけて動詞として用いるものは意味的に動作性を持つが、次のようにいうのは誤用であろう。

- ・(人は必ずしもしたい仕事をしているわけではないことについて)

競争ということがあるからだ。(K. こと→もの)

これは動作性ではあるが「競争というもの」というべきだろう<sup>注22)</sup>。あるいは「こと」を使うなら「競争するということ」と言い換える必要がある。ただし、「がある」が続く場合は“そのような場合がある”の意味の「動詞辞書形+ことがある」と紛らわしくなるので、使いにくい。

ところで、「動詞+ということ」「名詞+というもの」につねになるかということ、そうではなく、次のように「名詞+ということ」も使う。

- ・吉行 ラジオがわからない人に人工衛星は無理ですよ。(笑)

向田 人工衛星がわからなくても、まず宇宙というのだけでもねえ。

吉行 宇宙がもうわからない。僕は中学生の頃、友達とけんかしたことがあるんだけど、無限大ということがわからない。今でも同じね。(「向田邦子全対談」)

これは「わからない」という述語をとっているためだと考えられる。だから次のように述語を変えれば「もの」になる。

- ・無限大というものをこの目で見て確かめてみたい。

また、補文標識ではないが、日本語の次のような「こと」の使い方も「こと」の意味をとらえにくくさせていると思われる。

- ・あの人のこと、好きなの？
- ・私のこと、待っといてよ。
- ・あの社長さん、俺のこと、雇ってくれると思う？(「死んでもいい」シナリオ)

## 5. おわりにー日本語教師のための日本語文法、日本語学習者のための日本語文法

本稿では「こと」「の」「もの」の使い分けをどう教えるかという立場から、先行研究の述語の分類、日本語教科書での扱いを検討し、誤用例の分析を行なった。韓国人留学生の誤用例は能力試験1, 2級合格レベルの学習者13人分のものであるが、誤用の頻度には個人差もある。また、

注22) この誤用の場合、「～する場合がある」の意味の「ことがある」という文型を文末に使う機会が多いので、それにひかれたものとも推測できるが、何が原因かはわからない。

本稿は日本語と韓国語の補文標識の対照研究を目的としたものではないので、分析には不十分なところがある。

ところで、「の」「こと」両用では意味の違いがはっきりしない場合もあった。安藤貞雄（1986）は、井上和子（1976）が「道子は、この手紙を出す {こと／の} を忘れていた。」という例文について、意味の違いは感じられないとするのに対し、「形式の違いは必ず意味の違いを含意しているはずで、私の語感では、「こと」は手紙を出すという「抽象的な概念」を、「の」は手紙を出すという「具体的な行為」を表していると解されると主張している。ある2つの形式が同じように使われる場合、日本語教師が教室で説明しなければならない場合は、まず2つの形式が文法的に異なるふるまいをする場合、次にニュアンスの違いがあり、それによって使い分けがある場合である。そのいずれでもない場合には「同じだ」といってよい。たとえば「神戸へ行く」「神戸に行く」の行き先に着く助詞「へ」と「に」の違いは、あえて言えば「へ」は方向、「に」は到着地点を表すということになるが、母語話者の意識ではほとんど差を感じていないし、文法的にも区別をする必要がない<sup>注23)</sup>。このような場合は同じだといって差し支えない。問題となるのはニュアンスの違いが母語話者によって解釈にゆれがある場合であるが、形式が違えばつねに意味も違うはずだとは考えるのは現実には即しているとは言えないだろう。

話しことばと書きことばの差にも注意したい。上級になればなおのことそうである。これまでの研究ではおもに書かれた文や研究者の直感による作例が分析の対象となってきた。名詞節について言えば、話しことばは書面で読むのとは違い、連体修飾節が長くなると聞いて理解しにくくなる。だから、実際の使い方にはかなり差があると思われる。たとえば、「気づく」という動詞は「の」「こと」両用であるが、同時の場合は「こと」「の」どちらも使え、ニュアンスの違いもほとんど感じられない。

- ・机の上に置いたはずの書類がなくなっている {こと／の} に気づいた。
- ・隣の車線を走る車が急に自分の車に接近してくるのに気づいた。
- ・前を走る車のブレーキランプがついたことに気づかなかった。

これらの文は、「事件」について警察で供述しているような場合を除いて、友人に「事件」について話すような会話なら、次のように言うことの方が多いと考えられる。

- ・前、走ってる車がブレーキランプつけたんですけど、それに気づかなかったんです。

あるいは「気づいた」と言う必要もないかもしれない。

- ・机の上に書類を置いていたはずなんですけどね。ふと見たら、それがなくなってるんですよ。
- ・隣の車線、走ってる車がね、急にうちの車に接近してきたんです。

---

注23) 「パーティーに行く」というような目的を言う場合は「へ」は使えない。

「～のに気づいた」という言い方は自分の体験を客観化してとらえなおして述べるものである。臨場感のある語りにはそぐわないからだ。

このように、「の」「こと」「もの」の用法は研究しつくされたわけではなく、現実の用法をよりよく観察して検討し直すべきところが多くあると考える。

#### 参考文献

- 安藤貞雄（1986）『英語の論理・日本語の論理 対照言語学的研究』大修館  
井上和子（1976）『変形文法と日本語』大修館  
大島資生（1991）「連体修飾構造に現れる「という」の機能について」『人文学報』225号、東京都立大学人文学部  
奥田靖雄（1983）「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編）』言語学研究会編 むぎ書房  
工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』3  
国広哲弥（1992）「「のだ」から「のに」・「ので」へ - 「の」の共通性-」『日本語研究と日本語教育』カッペンブッシュ寛子他編 名古屋大学出版会  
久野暉（1973）『日本語文法研究』大修館  
佐治圭三（1993）「「の」の本質 - 「こと」「もの」との対比から」『日本語学』12-11  
寺田和子他（1998）『日本語の教え方ABC』アルク  
野田春美（1995）「ノとコト - 埋め込み節を作る代表的な形式-」『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編、くろしお出版  
橋本修（1991）「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163集、国語学会  
姫野昌子（1993）「日本語教育における「の」の指導」『日本語学』12-11  
藤田直也（2000）『日本語文法 学習者によくわかる教え方-10の基本-』アルク  
白峰子著・大井秀明訳・野間秀樹監修『韓国語文法辞典』三修社2004  
牧野成一（1996）『NAFL 選書 ウチとソトの言語文化学』アルク  
松岡弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

#### 用例

- 向田邦子「向田邦子全対談」文春文庫  
宮脇俊三「サラリーマン小遣いのやりくり」（立原正秋『대역문고(対訳文庫) 日本の名随筆』다락원 일번어 출판부訳注、다락원、Seoul2003 所収）  
（K-J コーパス）韓日並列 corpus 検索 韓国高麗大学李漢燮研究室 <http://www.trankj.pe.kr>  
「死んでもいい」（石井隆）年鑑代表シナリオ集1992  
「12人の優しい日本人」（三谷幸喜・東京サンシャインボーイズ）年鑑代表シナリオ集1991